

# 『方言心理学』おぼえ書き

藤 原 与 一

## はじめに

私がかねて、言語学は言語社会学と言語心理学との二体に分析される、と考えてきた。この考察にしたがつて方言研究を推進する時は、方言学のためにも、方言社会学と方言心理学との二体がうちたてられることになる。——（学の側面的な処理でもある。）

どちらかといえば、私の中には、方言社会学が、より早くかたちをなした。さて、近来しきりに胸中を往来する思考は、方言心理学についてのものである。いずれにもせよ、私は、これら二体の学を、「人間の学としての方言学」の実践として、まとめていきたく考えるものである。

かえりみれば、私に、「民間の言語心理」（『文学』VOL. 25 1957 2）との旧文がある。これは、私にとっての、自覚もおぼめかしいころの「社会心理学」的所産であった。

テ ー マ 「方言心理学」

私の設定する方言心理学は、言うまでもなく、方言心理の学である。このばあい、方言という述語にも心理という述語にもかたよらないで、方言心理という述語に、私は、一個のウエイトをおきたい。方言心理は、言うまでもなく、社会的なものである。

期するところの方言心理学は、方言生活の心理学である。言いかえれば、方言生活の研究の（方言学の）心理学的側面を言おうとするものである。これを心理学的方言学<sup>サイコダイアレクトロジ</sup>とも称することができる。

方言生活の心理学ゆえ、これは、いわゆる言語心理学の範疇を超えて、社会心理学的である。

方言社会学、すなわち方言生活の社会学は、方言生活の研究の（方言学の）社会学の側面をねらうものである。これは、社会学的方言学<sup>ソシオダイアレクトロジ</sup>と称することができる。

方言生活（→言語生活）は、生活行動にはかならない。私どもは、日ごろ、方言生活の研究にしたがって、言語行動学を実践している。（「言語と行動」という思考方式は、すでに、私どもに無用である。）言語行動は、もとより、社会においておこなわれるものである。したがって、言語行動学は、広義の社会行動学の内にあるものとされる。（注。南博氏の『社会心理学入門』には、「そうして、そのような全体社会の規模で社会行動を分析する学問は、社会行動学とよぶのがふさわしい総合的な共同研究の分野である。」とある。）私はいま、そのような言語行動学の中の方言心理学をまとめようとする。方言心理学と方言社会学との契合もまた、ここに明らかである。

## 方 法

方言心理学は、「社会心理学としての方言心理学」と規定することができる。方言心理学の方法とされるものは、言うまでもなく、社会心理学の方法であろう。

私は、いわゆる心理学の専門学徒ではない。しかしながら、方言研究にしたがつて、方言社会の方言生活にふれ、ここに追究の歩を進めて、いわば、方言心理の世界にあそんできた。端的に言って、私どもの方言調査は、社会心理学的作業だったのである。なんと久しく、社会心理学という述語をおき忘れてきたことか。

研究史によるのに、William McDougall は、一九〇八年に、『An introduction to social psychology』を発表した。

社会心理学とは何か。その道の人は、社会心理は、「人間の社会行動の心理」であると言う。社会心理は、集団、社会の持つなんらかのものが、個人の行動におよぼす影響である、などとも言われている。社会心理学は、「人間の行動を社会関係の中で（もとで）研究する。」ものであるという。知友の示した簡潔な定義は、「社会心理学は、人間の社会的な行動を研究するもの。」というのである。

私どもは、こういう定義を聞いて、一面、むしろおどろく。人間社会の人間の行動に、非社会的なものがあろうか。旧来の、修飾ぬきの「心理学」もまた、人間の行動の心理を問題にするばあい、もちろん、社会的な行動を問題にしてきたではなかったか。近年、「社会心理学」の言われることがつよいけれども、思うのに、これは、けっして個人心理学から隔絶されたものではない。現に、多くの社会心理学者は、その実験と調査とで、ずいぶん多く、個人心理ベースのしごとをしている。

社会心理学と個人心理学との相即は、自明であらう。私の、いささかの経験をもってしても、つぎのことが言える。社会心理学が樹立されて、それまでの個人心理学的作業が、多く、社会心理学化された。（社会心理学の名のもとにおかれた。）社会心理学と個人心理学との相即には、ラングとパロールとの相即を思わせるものがある。

私は、求めるところの方言心理学にあつて、社会心理学と個人心理学との相即の考えられる社会心理学を、方法とする。これまた、自明のことであらう。

二・三の例説にしたがう。文法ないし表現法は、すでに法の名をこうむっているのにも明らかたとおり、社会心理学の対象である。ところで、表現法をふまえるものに、表現がある。前者は一般的であり、後者は個別的である。表現を直接の対象とするものは個人心理学であらう。個人心理学と社会心理学との相即は、表現と表現法との相即に、さも似ている。つぎに、音韻は、社会心理学の対象である。音声は、個人心理学の対象にはかならない。社会心理学と個人心理学との相即にも等しく、音韻と音声との関係が、相即的である。造語法は、これまた法の名に明らかたとおり、社会心理学の対象になる。人の泣くまねを語にまとめて、「ナキマネ」というのがつくられているが、これは、「動詞連用形十名詞」の造語法を示すものである。ところで、一人の幼児が、おとなの「ナキマネ」という語を聞いて、なんのひょううしか、「マネ」に「豆」を思い、「ナキマネ」を「ナキマメ」と言いあらわしたとすれば、この時の「ナキマメ」は、明白な個人創作であって、いわば、個人心理学の対象である。造語の個人創作と造語法との相即もまた、個人心理学と社会心理学との相即に対応する。

## 作 業

方言心理学のために、私は、種々の調査作業をおこなう。

言ってみれば、私どもは、すでに、長年月、こうした作業を実施してきた。地方に旅し、それこれの村落にはいって、土地人士の間に起居し、私どもは、そこそこで、多くの方言心理を経験してきた。——じっさいには、その方言心理のやどるものを、すなわち方言事実を、かぎりもなくとりあげてきた。

社会心理学者は、ことに、心理学的方向の（社会学的方向のではなく）社会心理学者は、いわゆる実証主義を重んじる。実験と調査が、その人たちの生命である。その線にしたがって言うならば、私どもは、実験というよりも、調査その

ことを旨としてきたものである。今後、これにかわりがないであらう。

機械実験の方法を無視するものではない。しかし、ドイツでおこなわれた機械実験主義の方言調査の轍は、踏みたくない。方言心理の把握を目的とするからである。

作業の領野は、どのように見わけられるであらうか。今は、単純に考えても、まず表現法事象の領域がとりたてられる。観察を替え、局面をとりなせば、たとえば方言意識の領野がとりあげられる。この領域の中が、また細分される。要するに、作業領域の分析は、つぎに述べる学体系に対応してなされるはずのものである。

作業に関して考慮すべきは、把握の深みである。私は、方言心理学の名において、できるだけ深切に、方言生活の、社会心理学的な現実をとらえたいと考えるものである。

心理は、すべて、人間生活の深奥を示すものであらう。私も、方言学徒として、方言生活の社会心理学的な解明にしたい、できれば、深到の追究・把握に成功したい。

## 学 体 系

ここには、一書の発表を想定して、学体系を、いわゆる目次のかたちで述べてみる。

## 目 次

はしがき 方言研究の心理学的見地

第一章 方言社会の方言心理

第二章 社会意志

社会意志は、社会心理に属する。

社会意志は、「方言心理の社会」の内質をなす。

方言社会での社会意志のはたらきを分析すれば、次下のような心理把握が可能であるか。

その一 社会生活のやや公的な——いわば責任生活の——方向を見る

「家」の心理

協同の心理

孤行の心理（閉鎖の心理）

「世話をやく」の心理

つとめ・義理の心理

守株の心理

模倣の心理

不寛容・排他の心理

掣肘の心理

もとより、これらの心理を、方言生活に即して、具体的に説明していきたい。しかも、その説明が、深みを持つようにしたい。たとえば掣肘の心理をとりあげても、これは、人倫語彙の下向性の指摘などによって精説したいものである。

その二 社会生活の多少とも私的な——いわば無責任生活の——方向を見る

交際・つきあいの心理

「ふうがわるい」の心理（「人目」の心理）

導《社会連帯の一種》・評判の心理

嘘の心理《はなはだ対他的なもの》

嫉妬の心理

憎惡の心理

侮蔑の心理

諷刺の心理

滑稽の心理

娯楽の心理

無造作工夫の心理

旅人（お遍路さん、遊芸の人など）をむかえる心理

旅出（もの参りなど）の心理

もとより、これらの心理把握は、方言生活そのものの描写による。たとえば娯楽の心理についても、私どもは、民間歌謡の即興性などを実証して、その心理を深く追究することができる。

### 第三章 方言意識と方言圏

社会意志の一態として、方言意識をとりたてる。方言社会に方言意識がある。

#### 1 方言圏の大小

#### 2 方言生活圏

以下、汎社会的な見地で。「どの社会にあっても」との心である。あるいは、「なんらかの社会で」との心である。

#### 第四章 表現法の心理

これは、かたんに、語法の心理あるいは文法の心理と言ってもよく、また、おもむきをかえて、発想の心理と言ってもよい。文法上の命令形などは、たちまち好個の問題になるであらう。とりわけ重要な問題とされるのは、待遇表現法である。あるいは、広く言って、婉曲表現法である。一例をあげてみる。愛知県尾張西部の一地で経験したことである。一中年婦人は、私の「どうもごちそうさまでございました。」とのあいさつに対して、「オムツカシュー ゴザイマシテ。」と返事のあいさつをした。この婦人はまた、夕食後、お膳を下げにきて、つぎの間で、「エライ オムツカシュー ゴザイマシテ。」と、ていねいにあいさつした。つぎに、この家を辞去するさいのことである。私の礼辭に答えて、当家の主人は、「オムツカシュー ゴザイマシタ。」とあいさつした。これらに見える「オムツカシュー」は、私どもに、深い探究を要求してやまない。方言心理学の最大の研究課題の一つは、待遇心理であるとも言えようか。

特異な表現法の一々に、所定の言語心理があることも、また明らかであらう。

#### 第五章 音韻の心理

ただちに思いおこされるのは、柳田国男先生の説かれたN音効果である。これに加えて、M音効果もまた、重要視すべきではなからうか。日本人は、ことあるごとに、「マー」の発話をしている。なぜ、このように、「マー」が、頻用されているのか。与論島では、文表現の末尾に「ヒン」がつけられると、それは、目下に対する言いかたになるという。「ヤン」がつけられると、目上に対する言いかたになるという。「ヤン」音と「ヒン」音との、作用上の大差が注目される。



音韻の心理と文法の心理とに關しては、先掲の「民間の言語心理」に、いくらかのことが述べてある。

## 第六章 語詞・語彙の心理

便所は、かつて「お閑所」とも言われた。今日の「お手洗い」という語も注目すべく、旧の「お手水」という語もまた注目すべきものである。総じては、生活の下卑の方向を見れば、そこに、語詞製作の心理の、きわめてあらわなうごきがあるのを、看取することができる。

それぞれの語彙分野に、相当数の語が、しぜんにとりそろえられている。その集合は、ただちに、私どもに語彙の心理のえぐりとりをうながすものである。生活部面による語彙の豊富と貧弱とがまた、注視すべきものである。

以下、総括の二章である。

## 第七章 地方性・風土性

### 1 民俗心理事態

### 2 地方的な好悪——風土性——

## 第八章 方言心理現象の特異性

——方言人その心理像——

△方言心理学と方言社会学との相即▽

以 上

広島大学社会心理学研究室の上野徳美氏は、社会心理学について、学史にもわたり、多くのことを教えてくださった。深く謝し、厚くお礼を申しあげる。

(五七・一・三)